

塩を載せた船

小川未明

青空文庫

あか^{あか}ぼう^{ぼう}を おぶ^{おとこ}った、男の乞食^{こじき}が町^{まち}へはいつてきました。その男^{おとこ}は、まだそんなに年^{とし}をとったというほどではありませんでした。男^{おとこ}の乞食^{こじき}は、りっぱな構^{かま}えをした家の前^{うち}へきますと、立ち止^{たど}まつて、考^{かんが}え込みました。それから、おそるおそる門^{もん}の中^{なか}へ入^{はい}つてゆきました。

「どうか、なにかやってくさいまし。」と、声^{こえ}をふるわせて頼^{たの}みました。

しかし、家^{うち}の中^{なか}では、その小^{ちい}さい声^{こえ}が聞^きこえなかつたものか、返^{へん}事^じがありませんでした。

乞食^{こじき}は、つぎには、もつと大^{おお}きな声^{こえ}を出^だしていました。

「なにか、この哀^{あわ}れな子供^{こども}にやってくださいまし。」といいました。すると、家^{うち}の中^{なか}から、声^{こえ}ばかりで、だれも、顔^{かお}を出^ださずに、「なにも、やるようなものはない！」と、しかるように答^{こた}えました。

その日^ひは、どういふものか、乞食^{こじき}は、何家^{どこ}へいきましても、同じようなことをいつて断^{ことわ}られました。

「こんなに、りっぱな、大^{おお}きな家^{うち}に住^すんでいながら、くれるようなものがないとは、不思議^{ふしぎ}なことだ。」と、乞食^{こじき}は、つくづく思^{おも}わずにはいられませんでした。

脊中^{せなか}におぶさっている赤ん坊^{あかぼう}が、腹^{はら}が減^へつたので泣^なき出^だしました。乞食^{こじき}は、どうしたらいいか、ほんとうに困^{こま}ってしまいました。

太陽たいようは、やがて西にしに傾かたむきかかっています。その日ひの光ひかりをながめて、ぼんやりと思案しあんにふけていますと、太陽たいようは、にこやかな円まるい顔かおをして、

「いつまでも、こんな人にんじよう情じようのない町まちにいたのではしかたがない。早くはや、日ひの暮くれないうちに、ほかの町まちへいったほうがいい。」と、諭さとしているように思おもわれました。

男おとこの乞食こじきは、自分じぶんたちに、不人情ふにんじようであつた町まちをうらめしそうに、幾いくたびも見みかえりながら、疲つかれた足あしをひきずつて、とぼとぼと、また遠とおい道みちを歩あるいて、ほかの町まちをさしていったのであります。それから三日みっかばかりたちました。ある町まちをあるきまわつていますどきに、乞食こじきは、三日みっかばかり前まえに自分じぶんがたつてきた町まちが、すつ

かり海嘯つなみのためにさらわれてしまった、というようなうわさを聞ききました。

乞食こじきは、夢ゆめのような氣きがしました。そして、あの町まちはどうなつたろうと、りっぱな構かまえをした、いろいろな形かたちをしていた家うちなどを、目めに思おもい浮うかべたのであります。

「人間にんげんというものは、不幸ふこうにあわなければ、人情にんじょうというものを悟さとるものでない。」と、彼かれは、いつか聞きいた言葉ことばを思おもい出だしました。

「そうだ。あの不ふしんせつであつた町まちの人々ひとびとも、きつと思おもいあつたろう。いまごろはどんなにやさしい人ひとたちになつてゐるかしれない。きつと、手てがなくて弱よわつてゐるものもあるう。自分じぶんの

ようなものにも、される仕事しごとがないとはかぎらない。どれ、ひとつ、その変わかつた町まちへもどつてみようか。」と思おもいました。

そして、彼かれは、いつも、自分じぶんの胸むねに思おもつたことは、はたしてい
いかどうであるかたずねてみるように、太陽たいようを仰あおいだのであり
ます。

太陽たいようは、あいかかわらず、にこにこしていました。

「おまえが、そう思おもうならいつてみるがいい。」といつているよ
うでありました。

乞食こじきは、赤ん坊あかぼうをおぶつて、いつかたつた町まちへもどつてゆきま
した。海辺うみべには、白しろい、海鳥うみどりが空そらを舞まつていました。日ひの光ひかりは、
彼かれのゆく道みちを暖あたかに照てらしていました。

まだ、日^ひがまったく沈^{しず}みきらないうちに、乞食^{こじき}は、その町^{まち}のあったところに着^つきました。きてみると、びっくりしました。一軒^{けん}として満^{まん}足^{ぞく}な家^{うち}が建^たつていないばかりか、たいていは、波^{なみ}にさらわれてしまったとみえて、一面^{めんあ}荒れ果^はてた野原^{のほら}に変わ^かっていたのです。

人^{ひと}たちは、どうなったものか、影^{かげ}さえ見^みえませんでした。ただ、ところどころに木立^{こたち}がそびえていて、その枝^{えだ}に、髪^{かみ}の毛^けのからんだようにいろいろなものが引^ひつかかっている、ものすごい、みすばらしい有^あり様^{さま}が見^みられるばかりでした。

「まあ、こんなになつてしまったのか？」と、彼^{かれ}は、その荒^あれ果^はてた野原^{のほら}の中^{なか}に立^たつて、足^{あし}もとに散^ちらばった材^{ざい}木^{もく}や、もの^{もの}の壊^{こわ}

れたのや、大きな家おおうちが建たつていた跡あとらしい、礎いしずえなどを見みまわしながら、いろいろの思おもいにふけたのです。

彼は、あまりのはげしい変かわり方かたと、あわただしいできごとのために、なにを思おもうともなく、しばらくは、ただぼんやりとしていました。

そのうちに、青あおざめた月つきが空そらに上のぼりました。そして、この荒あれはてた景色けしきと、ぼんやりと考かんえ込こんでいる哀あわれな乞食こじきとを照てらしたのです。

そのとき、月つきが、うなだれている乞食こじきの耳みみもとにささやいたのであります。

「大きな海嘯おおつなみで、みんな沖おきへ持もつていかれてしまった。しかし、

まだすこしは残^{のこ}つていよう。おまえが、いつかなにかくださいと頼^{たの}んだとき、なにもやるようなものはないといったが、まあ、あすこをごらん、あんなに光^{ひか}っているものがある。あれはダイヤモンドだ。ぜいたくな女^{おんな}の指^{ゆび}にはめた、指輪^{ゆびわ}についていたのだ。まあ、あすこをごらん、あんなにぴかぴか光^{ひか}っているものがある。あれは、強^{ごう}欲^{よく}なじいさんが大^{だい}事^じにしまつておいた黄金^{こがね}の塊^{かたまり}だ。しかし、もうみんなその人^{ひと}たちは、どこへかいつてしまった。おそらく永^{えい}久^{きゆう}に帰^{かえ}つてくることがあるまい。また、その人^{ひと}たちを捜^{さが}したとて、永^{えい}久^{きゆう}に捜^{さが}しあてることができまい。あの宝^{たから}は、みんな腐^{くさ}つてしまうか、地^ちの中^{なか}にしぜんにうずもれてしまうのだ。おまえはあの宝^{たから}で、もう一度^ど、りっぱな町^{まち}をこのところに建^たてる

かんが
考えはないか。そうすれば、わたし こんや たからのこ私は今夜、宝の残っているところを
おし教えてやろう……。」

あお青ざめた月つきは、太陽たいようのように、けっして、にこやかな顔かおはし
ていなかったけれど、まじめになって、こじき乞食にいました。

わたし「私わたしみたいなものに、そんなことができようか？」と、こじき乞食はう
なだれて思案しあんをしました。

「なに、いっしょうけんめいになってやれば、できないというこ
とはないはずだ。おまえにできなかったときは、おまえの子供こどもの
時代じだいにできるにちがいない。おまえは赤ん坊あか ぼうをおぶっているでは
ないか。」と、月つきは、はつきりとさえた声こえでいいました。

こじき乞食は、ついにやってみる氣きをおこしました。

「どうか、お月さま、私に宝の落ちているところを教えてください。」と、月を見上げて願いました。

月の光線は、身軽にどんな狭いところへもくぐり込みました。またどんなものの上へもはいまわりました。こうして乞食は、月の助けによつて、たくさんのお宝物を拾い集めることができました。

夜が明けると、太陽が彼を励ましました。乞食は、境遇で貧乏をしましたけれど、りこうで正直な人間でありましたから、四方から、あらゆる方面の知識があり、勤勉に働く人たちを呼び集めて、町を新しく造りはじめたのであります。数年の後には、その町はりっぱにできあがりました。そして、

煙突からは、黒い煙が流れていました。工場や、製造場などが、いくつも建てられました。しかし、だれも、この美しい町が乞食の手によって造られたということを、おそらく知るものになかったでありましょう。

昔の赤ん坊は、大きくなつて、いまでは、いい若者となりました。父親は、財産を残して亡くなりました。その後で、若者は、父親の仕事をついで、よく働いていました。

ある日のこと、若者は夢を見ました。

なんでも、あまりにぎやかでない、はじめて通るような町を歩いてゆきました。すると、あちらに白い桃の花だか、すももの花だか、白くこんもりと浮き出たように咲いていました。彼は、そ

の花を^{はな}目^めあてに^{ある}歩いて^{ある}いますと、その木^きの下^{した}に、小^{ちい}さな理^り髪^{はつてん}店^{てん}
 が^{あり}まし^た。主^{しゅ}人^{じん}とい^うのは、顔^{かお}つ^きの四^{かく}角^{かく}な人^{ひと}で^{して}、が
 み^がみと小^こ僧^{ぞう}を^しか^つて^いまし^た。小^こ僧^{ぞう}は汚^{よご}れた白^{しろ}い上^う着^{わぎ}を^着て
 働^{はたら}いて^いまし^た。顔^{かお}色^{いろ}が青^{あお}くて、体^{からだ}がや^せて目^めば^{かり}大^{おお}きく飛^と
 び^で出^でて^いまし^た。

「おま^{やと}えは、ど^こか^ら雇^{やと}わ^れて^きた^のか？」と、若^{わか}者^{もの}はた^ずね
 ま^すと、小^こ僧^{ぞう}は、大^{おお}きな目^めに、い^っぱ^い涙^{なみだ}を^ため^て、
 「私^{わたし}に^は、お父^{とう}さ^んが^あり^ませ^ん。お母^{かあ}さ^んも^あり^ませ^ん。た^だ
 一^{ひとり}人^{いもうと}の妹^{いもうと}が^あり^まし^たが、いま^は、ど^こに^いる^か知^しら^ない^ので^す
 。」と^{こた}答^{こた}え^た。

目^めが^さめ^ると、そ^れは夢^{ゆめ}で^あり^まし^た。け^れど若^{わか}者^{もの}は、小^こ僧^{ぞう}

の顔が、目についていてどうしても離れませんでした。

「私には、弟も、妹もないはずだ。」

彼は、終日、昨夜の夢を思い出して考え込んでいました。

二、三日すると、彼は、また、不思議な夢を見ました。

ある工場で、まだ十三、四の少女が、下を向いて糸を

採っていました。すると、いつか夢で見たことのある理髪店の

主人よりは、もっと、恐ろしい顔つきをして、黒い洋服を着

た、脊の高い男が、ふいに少女をむちでなぐりました。

「なにを、ぐずぐずしているのか！」

少女は震えあがりました。そして、真っ赤な顔をして、泣

きながら、せつせと糸を採っていました。

目がさめると、これもやはり夢でありました。若者は、どう
いうものか、この少女の顔もこのときから忘れることができ
ませんでした。

「俺は、どうしてこんな夢を見るのだろう。もっと愉快な夢を、
なぜ見ることができないのか。おもしろい、愉快な夢は、みんな
ほかの人が見つくしてしまったというわけでもあるまいが。」と、
彼は思いました。

この世の中にもおもしろい、楽しい夢がなくなってしまった時分
には、どこからか船に乗せていろいろな夢をもってきて、港に着
いてから、人の知らぬ間にまき散らすのだと、いつかこの町に入
ってきた巫女がいったということでした。

どんな船ふねが、どんなような色いろの帆ほを掛けて夢ゆめを運はこんでくるか、

まだだれも見みたものはなかったのです。

ある夜よ、若者わかものは、第三だいの夢ゆめを見みました。

暗い晩くらばんに、雪ゆきの凍こおった、細道ほそみちを歩あるいてゆくと、あちから笛ふえ

を吹ふいて、とぼとぼと歩いてくる年としとつた盲目めくらの女按摩おんなあんまに出であ

いました。

「おまえさんはこの年としになって、どうしてこんな寒さむい晩ばんに働はたらかな

ければならないのか。」と聞ききますと、

「私は不幸わたくしふこうな女おんなです。最初さいしよ夫おつとをもつて、かわいらしい男おとこの子こが

生まれると、夫おつとは、その子供こどもを連つれて家いえを出でてしまつたつきり帰かえ

つてきませんでした。しかたなく、それから三年ねんばかりたつてか

ら、私は二番めの夫をもちました。そして、一人の男の子と、一
 人の女の子を生みました。しかし、私たちの幸福は、長くはつ
 づきませんでした。夫は病氣をして死んでしまいました。まも
 なく私は目を患つて、両方の目とも見えなくなつてしまいま
 した。私は、二人の子供を親類にあずけました。その親類は、
 しんせつではありませんでした。二人の子供をどこかへやつてし
 まいました。それからというもの、私は、所を定めず、さまよつ
 ているのであります……。」

目がさめると、それもやはり夢であつたが、どういうものか、
 その年とつた盲目の女のようにすが、なんとなくみじめで、目から
 取れませんでした。

若^{わか}者^{もの}は、このごろつづけて見た^み夢^{ゆめ}が、深^{ふか}く、彼^{かれ}の心^{こころ}をとらえて、仕^し事^{ごと}も思^{おも}うように手^てにつかなく、海^{うみ}辺^べへ出^でては、沖^{おき}をながめながらぼんやりと暮^くらしていました。

彼^{かれ}は、父^{ちち}親^{おや}のい^いつたことを思^{おも}い出^だしたのです。

「私^{わたし}は、まだほんとうに哀^{あわ}れな人^{ひと}というのを見^みなかつたが、もし、この後^{のち}、おまえが、哀^{あわ}れな人^{ひと}を見^みたときは、その人^{ひと}を救^{すく}つてやらなければならぬ。これが、私^{わたし}のただ一つおまえにいい残^{のこ}してお^おく、大^{だい}事^じなことだ。おまえは、それを守^{まも}らなければならぬ。」

父^{ちち}親^{おや}は、子^こ供^{ども}に向^むかつてこ^こうい^いまし^した。若^{わか}者^{もの}は、遠^{とお}く沖^{おき}の方^{ほう}を赤^{あか}く色^{いろ}づけて、日^ひの暮^{くれ}れか^かる海^{うみ}の上^{うへ}を見^みながら、父^{ちち}親^{おや}のい^いつたことを思^{おも}い出^だしていたのであります。

「俺おれの夢ゆめは、ほんとうのことなのか？ それなら、俺おれは、あの哀あわれな少しょう年ねんと、娘むすめと、あの哀あわれな子こ供どもを失うしな母は親おやとを助たすけてやらなければならぬ。」

ある日ひ、沖おきに不思議ふしぎな、見みなれない船ふねが泊とまっていた。若わ者ものは、すぐにその船ふねを見みつけて、

「どこからきたのだろう。あの船ふねはなにかおもしろい夢ゆめを乗のせてやってきた、魔まの船ふねではないかしらん。」と思おもいました。

すると、昼ひるごろ、年としとった白髪しらがの脊せの低ひくい船せんちよう長おかが陸あに上あがってきて、このあたりをぶらぶらと散歩さんぽしていました。

若わかもの者ものは、船せんちよう長おかがそばを通とおりかかったときに、呼よび止とめました。

「あの船ふねはどこからきました？　いろいろな夢ゆめを乗せてくるとい

ううわさの船ふねではありませんか。」と、若者わかものはたずねました。

すると、船せんちよう長ちやうは、大きな口おほくちを開けて笑わらいました。

「お伽とぎ噺ばなしに、そんな話はなしがあるが、あの船ふねは、そんなものじや

ない。毎年まいねんのように、この港みなとへ昔むかしからやつてくる船ふねなのじや。」

「昔むかしから？」

若者わかものは、びつくりして、年としとつた船せんちよう長ちやうをながめました。

「おまえさんは、だれなのじや。」

船せんちよう長ちやうは、こう若者わかものにたずねました。

若者わかものは、自分じぶんの父親ちちおやが、海嘯つなみで滅ほろびてしまったこの町まちを、

ふたたび新あたしく建たてた人ひとであることを語かたりました。船せんちよう長ちやうは、

うなずきました。

「なかなかりっぱな町まちになった。私は、昔むかしの町もよく知しっている。
私は、昔むかしから、この町まちに塩しおを積つんでくるのだ。」と、船長せんちょうは
いいました。

「塩しおをですか？」

「そうじゃ、この町まちでは、塩しおができないのだ。」と、船長せんちょうは

答こたえました。

船長せんちょうは、しばらく若者わかものの顔かおを見ていました、が、

「おまえさんは、夢ゆめでも見みなかつたかな。」といいました。

若者わかものは、このごろになつて、不思議ふしぎな夢ゆめをつづけて見みたこと
を話はなしました。すると船長せんちょうは、

「それはみんなほんとうのことなのだ。おまえさんと、おまえさんのお父さんとうの昔むかしのことを知しっているものは、私わたしばかりじゃ。哀あわれな小僧こぞうや、娘むすめや、母親ははおやがいるのは、そんなに遠方えんぼうの町まちではあるまいから、おまえさんはその小僧こぞうと娘むすめと盲目めくらの按摩あんまを探さがしな

さるがいい。人間にんげんというものは、意外いがいなところに、不思議ふしぎな因縁いんねんがつながっているものだ。私わたしは、また来年らいねんか、来々年さらいねんも

う一度どこの港みなとに塩しおを積つんではいってこよう。そのときには、不幸ふこうな人ひとたちが、しあわせになつて、みんなが喜よろこんでいる姿すがたを見たい

ものじゃ。」と、船長せんちょうはいいました。

若者わかものは、船長せんちょうの話はなしによつて、深く感動ふかかんだうしました。そして、自分じぶんには、不幸ふこうな母ははと、腹はらちがいの弟おとうと妹いもうとがあることを知しり

ました。

まったく、あてのない望みのぞを抱いだいて、彼は、その父ちちの造つくった美
しい町まちを去さつて、終おわりない旅たびへと出でたのであります。

太陽たいようは、あいかわらず、にこやかに、彼かれの歩あるいてゆく道みちを照て
らしていました。

「昔むかし、おまえちちの父あかは、赤ん坊ぼうのおまえをおぶつて、このように、
あてもなく歩あるいたものだ。おまえも希望きぼうを捨すてずに歩あるくがいい。」

太陽たいようは、こよいいました。

夜よになると、若者わかものは、大空おおぞらの月つきの光ひかりをあお
仰あおぎました。月つきは、

また語かたつたのです。

「町まちよりも、宝ほう石せきよりも、どんな富とみよりも、人にん間げんの愛あいという

ものは^{とうと}貴いものだ。私は^{わたし}、それらの不幸^{ふこう}な人^{ひと}たちを毎夜^{まいよ}のように^て照^てらしている。おまえは、いつまでも美しい^{うつく}、^{とうと}貴い真心^{まごころ}を捨^すててはならない。」

若^{わかもの}者の旅^{たび}は、それから、夜^{よる}となく、昼^{ひる}となくつづきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年5月

※表題は底本では、「塩《しお》を載《の》せた船《ふね》」
なっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

塩を載せた船

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>